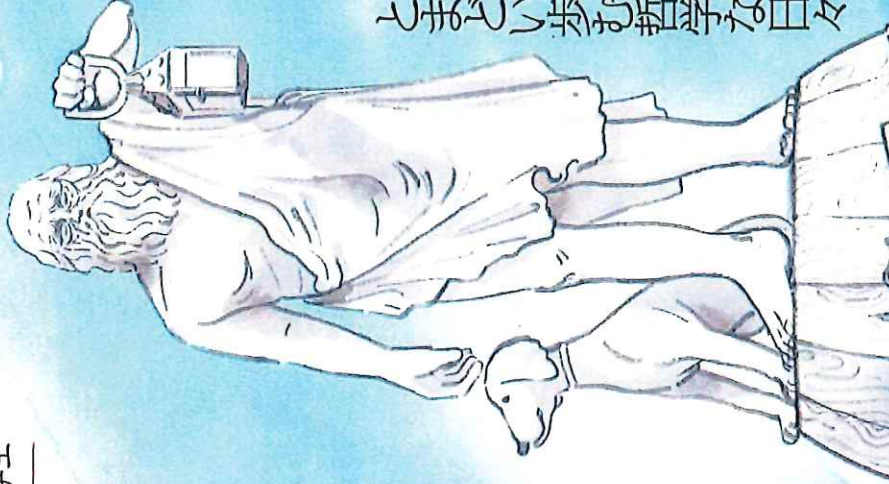




# 犬儒派宣言

とまどい歩む哲学な日々



Ichinose Masaki

一ノ瀬正樹

M E T L L E R

すべては一頭の犬との出会いから始まった――。

思いがけず犬を迎え入れることになった哲学者が過ごした、  
賑やかで愛おしくも、ちよびり切ない日々を綴ったエッセイ。  
他愛ないイタズラ、それぞれの個性、そして別れ……

彼らとともに過ごすことで起きたさまざまな出来事を、  
哲学者ならではのまなざしで描く。

人が動物と共に生きるとは、どのような営みなのか。

日常生活のすぐ隣に広がる、哲学の豊かな可能性が見えてくる。



9784065434185



1920310018009

ISBN978-4-06-543418-5  
C0310 ¥1800E



KODANSHA

## いざ、世界の世界へ！ イヌ目線の世界へ！

東京大学名誉教授と愛犬たちの  
愉快でちよびり切ない哲学散歩。

M E T L L E R

母が亡くなったとき、しずかを散歩に連れていきながら、ああこの世界は  
母がいない世界なんだな、とつくづく思った。町の風景はほとんど変わら  
ない。しかし、ある人物がいないときの町の風景は、ある人物がいたとき  
の町の風景とは異なる。もっと変な言い方をすれば、隣家の家の壁は、  
母がいたときの壁から、母がいないときの壁へと変化したのである。壁そ  
れ自体には何の変化もないとしても、である。突然私はそのような感傷に  
捕らわれた。身震いするような痛みだった。

——第1章より

犬儒派の哲学の実践は、一朝一夕にはいかない。けれども、あせる理由は何もない。不思議に思うことを見つめ、無心で夢中に、できるだけ素直なそして素朴な犬目線を心がけて、下へ下へと潜著するだけである。それには、子どもの目線になることも一つの道筋であろう。あるいは、できるだけ当たり前前から離れた視線を持つと全力で想像してみるやり方もあるだろう。その道へと歩を進めてみよう。

### 子どもの発想

「なぜ」、「どうして」。子どもはこういう問いかけをしつこくするときがある。雪が降ったり、停電したりすると、「どうして」ってきく。大人はそれなりに説明するだろう。降雪について、上昇気流だとか気温差とか地形などによって説明する。停電は、発電の仕組みや送電線などに触れて説明するだろう。でも、子どもはなかなか納得してくれない。なぜだろう。それはおそらく、子どもの疑問は、「そもそも」なぜ雪が降るような仕組みが自然の中に備わっているのか、「そもそも」なぜ電気というものが発生するように世界ができているのか、ということの問題にしているからなのだと思う。そのような「そもそも」論は、大人はスルーしてしまいがちだ。いや、そんなことは当たり前じゃないか、と思っているからなのかもしれない。

けれども、本当はそうした「そもそも」の疑問に答えなければ、子どもの疑問に答えたことにならないのではなかろうか。犬儒派哲学ならばなおさら、こうした「そもそも」の問いを真正直に扱わな

ければならない。そして、そうした「そもそも」の疑問に対して、とことん解決しようと努力し思考した上で、最後には、私たち人間はそれには真には答えられないのだと、無知なのだということを、深いレベルで、骨の髄まで身にしみて感じてもらわねばならない。そうしてはじめて、犬の目線に近づき、不思議さ不可解さを受容した上で安らう境地が見えてくる。

けれども、学問とは、なにか疑問を提起して、その理由や原因や構造を知り、理解に至ることを目的とするはずだと思われる。この当たり前の定義からすると、哲学はむしろ「反学問」なのではないか。無知を自覚することを目指すなんて。でも、落ち着いて考えれば、大人だつて実はいろいろなことに無知であることは気づいているはずだ。自分の誕生前に世界は存在したのだろうか。「存在した」と完璧な自信をもって皆さんは言えるだろうか。記録や証言など、いろいろな証拠はありそうだが、それらは「いま」私の前にあるものであつて、それらが私が生まれる「前」の何かに発していることは直には見られないし確認できない。というか、原理的に、私は自分の生まれる前のことについて、いくら知ろうともがいてもリアルには知れないのである。絶対に無理なことを、哲学では「論理的に不可能」とか「ア・プリオリに不可能」などという。自分の誕生前の世界の存在を確実に確証するのは「ア・プリオリに不可能」なのである。これに気づくと、ちよつとぞつとする。足下が揺らぐような感じがする。そう、それが哲学の入り口なのである。そしてぞつとするを経過した上で、そんなものさと馴染んできたとき、犬目線に近づき、犬儒派哲学が現れ始める。

私は、ご縁があつて茨城県かすみがうら市の青葉台初等学部で「子どものための哲学 (Philosophy

for Children) (略してP4C。以下、本書では「子ども哲学」)の授業にかかわっている。「子ども哲学」は近年世界中で盛んになってきている、新しい教育の方法である。最初に「死んだらどうなるの?」というテーマで、意見を出示してもらった。これは、まさしく「そもそも」の疑問であり、そして無知であると悟らざるをえない代表的問いである。子どもの発想はとても面白い。なかでも、「死んだ人に聞けばいい」という真直球の意見がブレイクスルーをもたらした。当然、「死んだ人はいないのに、どうやって」ということになる。そこで「ない」とはどういうことか、という問いが生まれる。私が助け船を出して、「ない」には、もとからない「非存在」と、どこかにいるけどそこにはいない「不在」と二種あるけど、死んだ人がいないのは、どっちなんだろうと問いを深めていった。皆さんはどう思うだろうか。こういう問いを一所懸念考えて不思議感を抱くことは、爽快な営みであり、そして私たちに謙虚にしてくれる。犬儒派の境地はすぐそこにある。

### 交差するウンとホント

青葉台初等学部で、再び「子ども哲学」の授業を行った。先にも触れたが、「子ども哲学」とは、子どもに哲学の問いを向けて、いろいろ議論しあう教育のことである。普段あまり発言しない子が活発に意見を言い始めるなど面白い効果があり、思考力の鍛錬にもなり、いまや世界的に盛んに行われている。今回は、「ウンをついていいときって、あるの」というテーマで、小学校の高学年の児童たちと議論をした。「エイプリルフール」だとか、「人のためになるウンならいい」など、予想した答え

がまず出てきた。

しかし、そもそもなぜ「ウンをついてはいけない」という倫理観が受け入れられているのだろうか。演劇など、ある意味で「ウン」をつくことを本質とする営みもある。日常の挨拶や会話でも、余計な心配をさせないようにとある種の「ウン」をつくことなどいくらでもある。教室で船を漕いでいて、先生に「眠いのか」と聞かれて、「いえ眠くありません」などとウンをついたことはないだろうか。では、なぜ「ウン」はだめなのか。大きな要因として、ウンをついていいとしてみようと、情報伝達や約束が成立しなくなってしまう、社会運営や人々の安全が阻害されるという点が挙げられるだろう。台風接近の情報や、土地売買の契約など、ウンが入ると大きな混乱が生じる。

しかし、ここで、「人のためになるウンならいい」という先の意見が再浮上する。台風情報のウンはまずいが、心配させないように、気がかりがあっても「何でもないよ」と述べるウンはさほどの罪がないようにたしかに感じられる。だとすると、実は深刻さの「程度」が問題になっているのではないか。だが、そうだとすると程度をどう測定するのか。恣意的になってしまい、なし崩しに全部のウンがいいとなりかねないのではないか。でも、厳密に絶対にウンはだめ、という謹厳な態度は実際上果たして本当にベストなのか。出された料理を不味<sup>まず</sup>と思ったとき、「不味いですね」と述べるのが道徳的に正しいとすべきなのだろうか。どうにも謎である。もともと、犬は「ウン」をつかひけれどね。不味いものは絶対食べない。犬が人間を見つめるときは、「ウン」などひとかけらもない。「ウン」を論じなければならぬという時点で、人間は犬よりも劣位なのだろう。トホホ、で